

企画名： 「ふくしま若もの会議」
実施日時： 1月14日（土） 13：00～16：30
実施場所： パシフィコ横浜会議センター 3F 315
登壇者： なし
参加人数： 約150名
文責： 木村義彦、遠藤章弘、佐藤健太（若もの会議）

「若もの会議」は「若もの会議—最近、福島どう？そっちはどう横浜！？—」をテーマに開催しました。様々な福島の声を発信し、身近な存在（問題）として福島を感じてもらいたいという私たちの思いから企画しました。

この企画の目的は第1に福島の声を伝えること、第2にそれらを共有する話の場を設けること、第3に話し合いから参加者一人ひとりが自分なりの目標を考えること、最後にこの企画で出会った方々がつながることです。この企画はまさに、脱原発の前に「福島の声」を伝える企画になったのではないかと考えております。

私たちの企画は福島若ものが議論し書き出した様々な声を展示し、それを基に意見交換をしました。福島の声を見聞きすることから、私たちの今、つまり「生活」を見直すことから議論を開始しました。脱原発について、放射線被曝や特定地域の方々の避難等の政策について、あるいは自分が感じている身近な問題等々、今回の若もの会議でもあらゆる関心ごとが議論されていました。その中でも、全体的な傾向としては「福島に住む学生が何を考えているのか知りたい」、「学生に限らず、福島で生活している方々の体験を知りたい」等、福島の方の「生」の声を聞きたいといった反応が圧倒的に多かったことが印象的でした。私たち企画者側にとってこのことを身を持って感じる事ができたことは大きな収穫でしたし、参加された皆様のそうした声にも幾分かは応えられたのかと考えております。

参加された方々には日本の大学生をはじめ職を持つ20歳代から30歳代の方々、大人の方々、子連れの参加者、そして海外から来た方々やインターナショナルスクールの学生といったように、実にいろいろな方にお越しいただきました。また、福島県出身の方々にも参加していただきました。みなさまはやはり脱原発に賛同して来られている方々がほとんどだったように思いますが、純粋に福島の人々がどのように今を感じ暮らしているのかを知りたい、そこから「原発」について考えていきたいという若ものの声もありました。この声は私たちにとっても、福島にとっても、重要な意味を持つ意見であったと強く感じました。

また、福島の方々が現在抱えている悩みや課題をシェアする機会にもなりました。例えば南会津から参加された方の風評被害で米が売れなくなってしまった、放射線量が低いので避難者をもっと受け入れることができるなどといった声がありました。この声に対して、グループでは「避難者を受

け入れるネットワークをつくれないうか」といった意見が出されたりして、参加者で真剣に対応を話されていました。このように今回の場合は、福島の声を知りたい、あるいは伝えたいといったものだけではなく、参加者それぞれが抱えていた何かが晴れること、そして会話の中で新たな繋がり・関係性が生まれたことに大きな意味があったのかと考えております。

私たちの反省点は福島県民の参加が少なくなってしまったことです。議論の途中では「福島県民の方から直接お話を聞きたい」という参加者の多くの声が多々ありました。人と人がより深くつながるには情報としての声だけではなく、心と心の、顔の見える交流が必要です。福島から参加者を募り全国の方々と直接議論をする機会をしっかりと作り出せなかったことは、私たちの企画として最大の課題となりました。しかし、こんなにも多くの方々が参加してくださったことは、まだまだ全国や世界に「福島の声」を知りたい、理解したい、学びたいといった人々が大勢いるということだと思っております。今後にもむけて福島の声と福島の人々をつなぐことをさらに意識しなければなりません。

東日本大震災やそれに起因した東京電力福島第1原子力発電所の事故は、私たちに深刻かつ長期に渡る複雑な問題を残しました。しかしどんな議題にも共通していえることは、これから私たちはどのように暮らしていけばいいのか、どのような未来を築いていくべきなのかを一人ひとりが考えることではないでしょうか。なので、物事の是非の問題からではなく、現実を正しく理解することが何より大事だと考えています。

原発の前にそこに暮らしていた「福島の声」があります。それをしっかりと聴き入れることは、私たちにとってもスタートです。それを基に福島の人たちと一緒に、私たちの身近な問題や生活からとらえ直すことが、未来へとつながるのだと思います。

今後は福島に住み支援や情報を求めている方々、生活支援といった様々な活動を始めている方々など、福島の人々を全国と世界の人々とつなぐことを検討していきたいです。

